フランスにおける「日本」のイメージ形成
―「ハラキリ」を中心に―

La Formation de clichés sur le Japon en France :
En cas du « Harakiri »

山崎　ゆき子
YAMAZAKI Yukiko

1. はじめに

知らない文化を理解するとは、どういうことなのだろうか？多くの情報や映像を瞬時にして送り、また、受け取ることが可能な今日であれば、他国の文化を理解するということは、さほど難しいことではないように思われる。しかし、そのようにして理解された「文化」は、その文化の現実を正しく表しているのだろうか？このことは、海外で報じられる「日本」や「日本人」あるいは「日本文化」にどこか違和感を抱くことがよくあることを考えるならば、明らかだろう。それは、現実のごく一面であったり、あるいは、すでに過去のものであったり、また、歪められたイメージであったりすることがよくあるからだ。これは、得られた様々な情報に依拠しつつも、その情報を何らかの既成概念、すなわち、すでに形成されているイメージをとおして見ているからではないだろうか。大量の情報を得られる今日であっても、このような「すれ違い」が起きるのであるから、情報が極めて少なかった時代であれば、なおさらであるだろう。

1931 年に、のちに文化大臣となるフランスの作家、アンドレ・マルローが、初めて日本を訪れた。その際、日本について日ごろから考えていることを記者団に問われ、「ハラキリ」と答えた。この答えに、記者たちは口元に皮肉な笑いを浮かべている[1]。また、寄港した中国で出会った日本の官吏が「ハラキリ」と聞いて大笑いした、とも述べ、マルローは憤慨している[2]。この状況は、「ハラキリ」がマルローにとって特別な意味と重要性を内包するものである[3]とはいえ、日本人には大きな違和感があったことを示しているだろう。当時の日本人の反応を見るならば、日本人及び日本文化にとっては、このイメージはすでに過去のものであり、決して現実を表しているものではない。ここに、双方の認識における大きな「ずれ」を見て取ることができる。

しかし一方で、マルローの日本文化へのこのような関心の所在は、「ハラキリ」を日本の文化を構成する大きな要素として、フランス人が捉えていることを示すものでもあるだろう。言い換えるならば、フランスでは、日本の文化として、「ハラキリ」のイメージが定着していたことを示している。

では、この「ハラキリ」のイメージは、どのようにして形成され定着したのだろうか。本稿では、20 世紀初頭のフランスにおいて、「日本」を理解するうえで、既成化していた様々なイメージの中から「ハラキリ」に焦点をあてて、19 世紀後半からの資料を基に、その形成過程を考察していこうと考える。というのも、この作業は、異文化はどのようにして理解されるのか、という問題の一端を解明することにつながると思われるからである。そしてそれはさらに、異文化を理解する際に陥りがちな、いわゆる「ステレオタイプ」の形成の一端を明らかにすることにもなるだろう。

2.「日本」の発見とともに

19 世紀後半、フランス人にとって日本を知る手立てとなったのは、書物、新聞、そして、現地で開催された日本に関連したイベントやスペクタクルなどが、主なものとして考えられる。1858 年に日本とフランスとの間で修好通商条約が結ばれ、人・物・情報の往来が始まる。それまで日本は鎖国政策をとっていたため、フランスの人々にとっては全くの未知の国であった。したがって訪れたフランス人が初めて目にする日本の風土・社会・風習・人々など、すべてが彼らの世界とは異なっており、彼らの大きな関心を惹いたのであった。このような新たな「発見」とも言える見聞情報は、本国へと伝えられることになる。当時、このような情報をいち早く伝えるのに貢献したのは、新聞である。日本についての情報は、各紙、情報源により当然のことながら状況は異なるものの、修好通商条約締結以前からもたらされ始めた。例えば、1843 年創刊の週刊挿絵新聞『イリュストラシオン』*L'Illustration*[4]では 1847 年に最初の日本関連記事が登場するが、これはオランダの版画を基にしたものであり、本格的な記事の掲載は、1857 年からである。また、同様に挿絵入りの週刊新聞『ル・モンド・イリュストレ』*Le Monde illustré* も創刊年の 1857 年から、フランス艦隊の乗組員からの情報を掲載し始めている。フランス最古の一般紙『ル・フィガロ』*Le Figaro* は、当初、情報源を持たなかったため、日本に関しては 1856 年に出所不明の小話が掲載されたのが最初で、日本や日本人の情勢を伝える記事としては、他紙の情報の転載という形で 1860 年からである。しかし以後、日本および日本人に関する記事を積極的に掲載するようになる。いずれも 1860 年代以降、各新聞は極めて頻繁に、日本に関する多様な記事を掲載するようになる。

このようにあらゆるものが珍しく映ったなかで、特に彼らの目を引いたもののひとつに、「切腹」があった。この情報が初めてフランスにもたらされるのは、『ル・フィガロ』1864 年 5 月 1 日号においてである。この号には、同年 2 月末にフランスに到着した池田筑後守遣仏使節団に関連した風刺小話がある。そのなかに、フランスでは「偏見」によって、「スペイン人はカスタネットなしでは一歩も歩けない」と信じられているが、「日本人に関しては、はるかに深刻」で、「日本人とは、もっとも些細な口実で自らの腹を切り開く s'ouvrir le ventre 人間」だと信じられている、という内容の記述がある。そして、「ジャーナリズム向け簡単うんちく辞典」での「日本人」の項目は、「この民族には自らの腹を切り開く習慣があり、子どもの頃からその訓練をしている」という内容を含むことになる、と記している。さらに、「日本の大使一行到着の知らせで、20 紙中 18 紙が日本人についてのその特異な流儀を書き込んだ」ため、「一行が到着すると、それを信じた群衆が、一行のうちの 1 人が突然着物を脱いで腹を切り裂く、という場面を見ることができるのではないかと期待し、彼らに付きまとい始めた」がその期待は裏切られた、という主旨の文章が掲載されている。これは一行の動向を伝えるニュースではなく、それを用いた小話であるが、全く異なる出で立ちをした一行が、人々の関心を惹き[5]、その慣習にも関心が向けられたことがよくわかる。この新聞は、1867 年に第2回パリ万国博覧会に幕府から大使として派遣された、将軍徳川慶喜の弟徳川昭武の言葉を引用した記事も掲載している。その記事は、昭武について、「自分は若すぎ、経験も十分ではないため」「使命を果たす能力がない」と述べた彼の控えめな態度が称賛された、としたうえで、自分は、「彼の有力な主人が、国の慣例に従って、彼に自らの腹を切り開くよう命令をしたとしたら、その時に初めて、この若い外国のプリンスの言葉を理解することだろう」と記している。

当時の日本人への関心は、『イリュストラシオン』に、竹内下野守遣欧使節団（1862 年 4 月 26 日号）、

池田筑後守遣仏使節団（1864 年 5 月 14 日号）、徳川昭武一行（1867 年 4 月 27 日号）のフランスで撮影した写真を基に描かれた挿絵とともに、彼らの様子を記した記事を掲載していることからも見て取ることができる。そして、同紙 1867 年 5 月 4 日号は、「パリの日本人」というコラムを掲載し、切腹に言及している。その主旨は、「日本へ行った外国人が農民たちに自らの腹を切り開いてくれるよう頼んだら、自分たちはそのような高貴な身分ではないので、できないと、悲しげに言われた」、というものである。『イリュストラシオン』では、これが切腹に関する初めての記事である。

その後も折に触れ、両紙は切腹に関連した記事を掲載するが、特別な用語は用いられておらず「自らの腹を切り開く s'ouvrir le ventre」という表現で説明されている。また、先の引用からもわかるように、「切腹」の社会的・文化的背景などが理解されていない段階で、フランス人にとっては、まだ全くなじみのないものであることがわかる。そして、各紙は、そのようなごくわずかな情報で「日本人は全員が意味もなく切腹をする」と思い込んでいる状況に対して、それを風刺的な小話に仕立てることで注意を喚起していることも見て取ることができる。では、この状況に変化が現れるのは、いつ頃からなのだろうか。

「切腹」がより実体のある行為としてフランス人に捉えられるのは、1868 年からのようである。この年、日本では、フランス人水兵が負傷させられるとともに外国公使が襲撃された神戸事件、およびフランス人水兵 11 名が殺害された堺事件、そしてイギリス公使パークス一行の襲撃事件が起きている。当時は、開国に反対する武士たちの攘夷運動が極めて盛んだった時期であり、外国人への襲撃事件が頻繁に起きているが、なかでも前者 2 つの事件は、フランス人が被害者であったうえに、その結末が想像を絶するものであり、フランス人に大きな衝撃を与えた。神戸事件では、首謀者の滝善三郎が罪を問われ、公使たちの前で切腹を行った。その際の善三郎の堂々とした様子、実際に目の当たりにする切腹の光景が、本国に詳細に伝えられた。また、堺事件に関しては、事件に関わった者たちすべてに切腹が言い渡され、次々と切腹が行われ、同席したフランス軍艦長が、殺されたフランス人水兵と同数になったところで制止した。パークス一行襲撃事件は、一行が京都で天皇に謁見するところを、襲撃された。情報源により、報じる事件や情報は異なっているものの、各紙がこれらの事件を報じている。

『イリュストラシオン』では、1868 年 5 月 30 日号で神戸事件の滝善三郎処刑について詳細に報道している。その中で、善三郎の言葉として「自分の腹を切り開く」という表現の後に、「ハラキリ Harakiri」が用いられている。挿絵も、介錯人が刀を振り上げている場面が掲載され、非常に衝撃的なものとなっている。『ル・フィガロ』も同様に、5 月 20 日号で神戸事件の処刑の様子を報道し、言い換えの後に「ハラキリ Harakiri」と記している。ちなみにこの時点では、どちらの新聞も堺事件については報じていない[6]。『ル・モンド・イリュストレ』は 1868 年 6 月 13 日号で堺事件とパークス一行襲撃事件について、駐日フランス軍砲兵隊長の署名入りの詳細な手紙を掲載しており、双方で一面を超える分量である。その中で、「自らの腹を切り開く」という言い換え付きながら、「ハラキリ hara-kiri[7]」という語が使われている。挿絵も、パークス事件は第 1 面に大きく、また、堺事件は、第 2 面すべてを用いて、武士たちが襲撃している最中の場面を掲載しており、見る者に大きなインパクトを与える。

どの新聞も「ハラキリ」という語を用いたのは、この時が初めてである。その後、1870 年代においては、日本を紹介する多くの記事に混ざって、『ル・フィガロ』を中心に、攘夷事件などの日本の動向を伝える記事が掲載され、その中で「自らの腹を切り開く」という表現が、「ハラキリ」も時に混在するという形で用

いられている。

一方、日本に関しては、上記のような報道が示す姿とは別の側面もあった。1867 年にはパリ万国博覧会が開催されている。日本からは、幕府と薩摩藩、肥前藩が参加し、特に幕府と薩摩はそれぞれ大君館と薩摩館を建設して日本文化を代表する工芸品を数多く出品した。さらに、各パヴィリオンでは着物姿の女性や男性がフランス人を迎えて、「日本」を積極的に売り込んだ。これは、実際に訪れた人々を魅了しただけではなく、新聞も博覧会の詳細を報道した[8]。日本のこの戦略は、1878 年の第 3 回パリ万国博覧会においても踏襲され、日本のパヴィリオンでは、スタッフは江戸時代と変わらぬ姿をして人々を迎え、工芸品を展示し、「古き日本」が提示された[9]。

さて、書物に関しては、どうだろうか。日本に関する書物は、新聞において盛んに日本報道がされた 1870 年代になって、登場し始める。まず 1871 年には、『世界一周散歩』*Promenade autour du monde* (M. le Bon de Hübner, Hachette) という作品が出版される。この作品では、日本旅行記の中に、同年にイギリスで出版されたミットフォードの『昔の日本の物語』*Tales of old Japan* で紹介された 「忠臣蔵」を、「古き良き日本」の物語としてほぼそのまま転載している。その中には、「自らの腹を切り開く」と「ハラキリ」が混在して使われている。また、1877 年には、明治政府で民法作成に携わったジョルジュ・ブスケが『今日の日本と極東の諸港』[10]を出版している。この著作は、江戸時代の法律にも触れており、制度としての「ハラキリ」について詳述している。この中でも、「忠臣蔵」が挙げられている。

3.「日本」の流行のなかで

発見された「日本」は、1878 年のパリ万博での評判も加わって、大きな「日本」流行のうねりへとつながっていく。 19 世紀後半といえば、フランスでは、いわゆるジャポニスムが盛んに流行した時期である。周知のように、モネやゴッホなどの印象派の画家たちは、浮世絵に大きなインスピレーションを得た。また、日本の工芸品は大変な人気を呼び、多くのフランス人が買い求めた。さらに、これらを模した作品や、あるいはインスピレーションを得たフランス人による作品も多く制作された。代表的な例としては、エミール・ガレの作品を挙げることができるだろう。

このような「日本趣味」の潮流は、文学や演劇の分野にも広がっていた。日本の作品の紹介や日本を題材にした作品の創作が行われる。では、「切腹」は、どのような形で出てきているのだろうか。主なものを見てみよう。たとえば、エドモン・ド・ゴンクールは、1881 年出版の『ある芸術家の家』第1巻で、自らの浮世絵コレクションとともに、先に触れたミットフォードによる『昔の日本の物語』を参照しながら、「忠臣蔵」を2ページにわたり紹介している[11]。この中で、「自らの腹を切り開く」という表現とともに「ハラキリ」を用いている。さらに、第2巻では、自らのコレクションの脇差について詳しい説明をしているくだりがある。そのなかで、脇差を「自殺の宝石とも呼べるようなものだが、日本人が自らの腹を切り開く、ハラキリあるいは切腹 seppuku をする際に用いる刀[12]」と記し、「ハラキリ」の方法を詳しく説明している。

また、「忠臣蔵」は、1882 年に為永春水の作品のフランス語訳『忠実なローニンたち』*Les Fidèles Ronins*[13]が出版され、この時期にも引き続き紹介される。ゴンクールは、1884 年 2 月 22 日付けの日記で、このフランス語訳を読んだとし、その文学的価値を高く評価している[14]。また、『ル・フィガロ文芸版』*Le Figaro : Supplément littéraire* 1888 年 9 月 29 日号にも、この作品のあらすじが掲載されてい

る。その中には、「自らの腹を切り開く」と「ハラキリ」が用いられている。さらに、1886 年に『仮名手本忠臣蔵』の英訳からの重訳で『忠臣蔵』*Chou-Chin-Goura* が出版されている。1889 年には、『お菊さん』が大評判となったピエール・ロチが、「サムライたちの墓で」というエッセーで、「忠臣蔵」のあらすじとともに、泉岳寺詣での思い出を綴っている。彼は、その中で次のように記している。

> 昔、子どものころ、貴重な手稿本でこの《47 人の忠実なサムライたち》の物語を読み、この騎士道の英雄たちに夢中になった。この物語は、とりわけ私の心を打ったので、もし万が一にも、たまたま日本に行くことがあったとしたら、彼らの墓にお参りをしに行こうと心に決めていたのだった。[15]

そして、最後は次のように締めくくられている。

> この物語は、詳細を知っている者にとっては、非常に美しいのだ。ヒロイズムと極端なまでの名誉と、人間を超越した忠誠心で非常に感嘆させるのだ！（略）この物語は騎士道の高貴で偉大な過去についての考えを思い起こさせる。 — そして、今でさえもなお、私に向けて、私がこれほどからかってきた現代の日本に対しての、尊敬の影を投げかけるのだ。私は、ここに眠る 47 名の英雄に捧げる生花をもってこなかった。逆に、彼らの長の墓に置かれた花束からキクを一本抜き取り、 — フランスまで — 持っていく。それは、また、逆の形での、私が、彼ら全員の名声に対して払う同等の敬意なのだ。[16]

情感あふれる上記引用からは、ロチの「忠臣蔵」に対する深い想いを見て取ることができる。また、あらすじ部分には、「自ら腹を切り開く」という表現が使われ、「ハラキリ」については、浪士たちの 47 基の墓石には「特別な刻印が押されているのだ。すなわち《ハラキリ》である。[17]」という形で用いられている。

「忠臣蔵」は、演劇でも、前田正名の翻案によって『ヤマト』というタイトルで、1882 年に上演されている。さらに、新聞でも『ル・フィガロ 文芸版』で 1895 年に 2 回紹介される。また、1899 年になると、歴史学者ラ・マズリエールによる『日本史論』が出版される。この歴史書では、あらすじが 2 ページにわたり紹介されているうえに、フルページで「ハラキリ」と題された写真が掲載されている[18]。その写真に写っているのは、白装束で切腹をしようとしている武士、後ろに刀を振り上げている介錯人、横に 2 名の武士である。このように見てくると、「忠臣蔵」は多様な形で繰り返しフランス人に提示され、それとともに、「ハラキリ」は言い換えを伴いながら、刷り込まれていったことがわかる。

これらに加え、1882 年には『ハラキリ』*Hara-Kiri*[19]という小説が出版されていることも記しておこう。この作品のあらすじは、明治維新によって没落した大名家に仕えていた家臣が、すべての原因は外国人が日本に入ってきたことにあると信じて、外国人を憎悪し、外国人に斬りつけたあげく、最後に切腹をする、という内容である。これは、当時盛んだった攘夷運動と「ハラキリ」を結びつけたものと言える。

演劇に関しては、日本に想を得た、フランス人による舞台作品も制作されている。『ル・フィガロ』は 1876 年 12 月 28 日号で「日本が演劇で流行している」と記している。なかでも、1876 年 10 月に上演されたオペラ『コジキ』は好評を博し、75 日間のロングランとなり、12 月には、『美しきサイナラ』という芝居も

上演されている。両者ともに、中には「切腹」の場面あるいはそれへの言及がある。

この時期の日本や日本文化に対するフランス人の代表的な姿勢は、作家であり日本愛好家でもあったジュディット・ゴーチエの「私は、東洋人を見るのは好まない。(略) 彼らを想い描くほうが好きなのだ。[20]」という言葉に代表されるだろう。事実、大成功を収めた彼女の劇作品『微笑みを売る女[21]』は、現実の日本とは大きく異なる。しかし、そのことに関して、『ル・フィガロ 文芸版』は、上記の彼女の言葉とともに、次のようなコメントをしている。

> 彼女の言うとおりである。おそらく、あまりにも急激に変化する現実を目にしていたら、彼女の抱く理想を台無しにしてしまったことだろう。その理想から、直観によって、国やそこに暮らす人々を、現実を裏切ることなく、作り出すことができるのだ。[22]

彼らが取り上げるのは、過去の日本の一面に依拠した、彼らが見たい「日本」、こうあってほしい「日本」、好奇心と想像力を掻き立てる、遠い夢の国「日本」、であって、現実の日本ではない。 1891 年には、彼らの意識を一層直截に示す記事が掲載されている。5 月 11 日に起きた大津事件の報道で『ル・フィガロ』5 月 15 日号は、「犯人はサムライの一派に属している」と報道した。これに対し、東京専門学校の家永豊吉は、「日本は、相変わらず、外国人に対し憎しみの感情で動かされる、20～30 年前の国」という誤った判断を与える、という反論を編集部に送った。それに対して、『ル・フィガロ』側は、家永の手紙全文を掲載し、再反論を行っているのだが、その中に以下のような記述がある。

> (略) ウタマロ、すなわち青楼の画家[23]のほうが、現代の日本よりもはるかに、我々の関心を常に引くことだろう。我々が見たいと思うのは彼とその同類であって、〔改革によって新設された〕高等教育専門学校や経済学者たちではないのだ(略)。[24]

ここにはすでに、当時の日本人とフランス人の間での日本に対する意識のずれ、イメージのずれを見ることができる。そしてまた、当時のジャポニスムの底流に存在する意識を見て取ることができるだろう。

4. イメージの変容とその拡散

1900 年には第 5 回パリ万国博覧会が開催される。日本からは、川上音二郎一座が、自ら舞踊家でもあるアメリカ人興行師ロイ・フラーと契約を結び、興行を行っている。このときの出し物は、『袈裟と盛遠』(『遠藤武者』)と『芸者と武士』*La Geisha et le Chevalier* であったが、川上によれば、フラーから『袈裟と盛遠』に「ハラキリ」を入れるよう要望された。そして、このときの状況を川上は後年、次のように述懐している。

> すこぶる無理な注文ではあるが、日本の歴史も碌に知らぬ外国人を相手の芝居だから、盛遠一人殺したところが、別段歴史の罪人にもなるまい。(略)注文とならば商売だ。お望み通り腹を切って見せようと言うと、「其では血の沢山流れ出るように、出来るだけ凄く演って貰いたい。」「よろしい」とい

うので、トゥトゥ盛遠先生に、立腹を切らせることと相成った。[25]

さらに、この演出が大成功をおさめ、連日大入り満員が続き、興行回数も1日2回であったのが、次々と増え、最後は1日4回になったと回想し、観客の様子についても述べている。

（略）盛遠の狂言の如きは、フーラーが注文の腹切、シカモ立腹で刀を腹に突立てる、一文字に引回す、血がサッと迸る、咽喉を掻く、目を白黒してバッタリ斃れるまでの数分間が、仏蘭西人の最も喜ぶ狂言の山で、その拍手喝采は英米以上であった。後には拍手喝采ぐらいでは満足が出来ずに、ことごとく帽子を取って振るに至った。[26]

実際、彼らの芝居は当初から評判を呼んでいる。フラー座で演じる前の6月30日に、日本公使館で開催されたパーティーで『芸者と武士』を演ずると、『ル・フィガロ』は、芝居のあらすじを説明したうえで、一座の演技が素晴らしく、日本語がわからなくても、観客は容易に理解できると、絶賛している[27]。宣伝広告は連日のように出され、特に貞奴に関しては、折に触れ動向が報じられる。絶賛する記事は、他の新聞でも出されている。『イリュストラシオン』1900年9月8日号は、彼女を「パリは偉大な芸術家だと迷わず認めた」とし、川上一座についても平均よりも優れている、と評価している。そして、『芸者と武士』最終で演じる貞奴の死の場面の挿絵とともに、その演技の詳細を描写している。『ル・タン』*Le Temps* も1900年8月1日号で同じ場面を描写し、絶賛する記事を掲載している。

貞奴と川上一座に関する記述は、新聞ばかりではない。作家アンドレ・ジッドは、貞奴について「もしも彼女が2年後にパリに再びやってくるという希望を、私たちに既に与えてくれていないのだとしたら、彼女を見なかったことで、あなたが悲嘆にくれるのはもっともなことだと私は思うだろう。[28]」と記し、彼らの芝居をかなりの間隔を開けながら、6回見に行った、と書いている[29]。そして彼は、「貞奴のみがただ単に、素晴らしいと思う、ということはできないのであって、一座全体なのだ、本当に。[30]」と貞奴および一座の演技を絶賛している。彼は、それまで日本に特に関心を寄せていたわけではない。にもかかわらず、6回も見に行っているということは、川上一座の芝居の影響の大きさを物語っているだろう。さらに、貞奴のパロディーを演じる者まで現れている[31]。このような状況を見ると、その人気や影響力は極めて大きかったことがわかる。

この万博の延べ入場者数は、開催期間約7か月で5000万人以上を数え、5回の中で最も成功した万博だと言われている。川上一座の公演はほぼ4か月であったとはいえ、相当数のフランス人が彼らの芝居を見たことになる。さらに、川上一座は、この時の成功を受けて、翌1901年にもパリ・アテネ座で5か月近く公演を行っている。この時の演目にも、「ハラキリ」が入っている『袈裟と盛遠』、『芸者と武士』に加えて新たに『将軍』が選ばれている。『ル・フィガロ』は、この際は、川上一座の渡仏予定と公演予定演目を3か月前に報じ(1901年3月25日号)、公演開始後は連日のように広告を掲載し、たびたび評も載せている。なかでも1901年10月16日号に掲載された評に見られる、「そこでは、それがあたかも茶箱であるかのように腹を切り開く」という表現は、注目に値する。これは、先に引用した川上の切腹に関する言葉と相まって、彼が舞台で演じた切腹の場面の特徴をよく示しているだろう。

1901 年の公演の際には、演ずる貞奴および一座の絵葉書もつくられる[32]。2 年続けての彼らの公演は、多くのフランス人を観客として動員した。そして、また、新聞各紙が報じることによって、さらにその人気と評判は増幅された。彼らの演技は、その後も多方面で引き合いに出されており、フランス人にいかに強い印象を与えたかを窺い知ることができる。例えば、フランス人演出・フランス人出演による『芸者と武士』の公演も行われている。また、歴史学者ラ・マズリエールは、公演後 6 年が過ぎた 1907 年出版の著書で、歌舞伎の一場面の説明で、「日本のすべての演劇の中で最も有名なこの場面の美しさを理解するには、貞奴の素晴らしい演技を思い起こす必要がある。[33]」と記している[34]。2 年にわたる公演やそれを報道した記事、そしてその後の現象などによって、彼らの演じた「日本」のイメージが、多くのフランス人の中に拡散したと考えることができるだろう。すなわち、「ハラキリ」に関して言えば、興行師フラーが要求し、それに基づいて川上音二郎が演じた、エンターテイメント用に、きわめて表面的で単純化され、かつ歪曲された「ハラキリ」のイメージが、フランス人の間に拡散したということである。1903 年 5 月 7 日号の『ル・フィガロ』にある、「おそらく、日本では、非常に簡単に自らの腹を切り開く—そのことを、貞奴夫人と川上氏が最近、私たちにしっかりと見せてくれた」という記述は、まさにそのような現象を裏付ける証言と言えるだろう。それを窺わせる現象として、1901 年以降、『ル・フィガロ』には、割腹自殺を図ったフランス人の記事を散見するようになる[35]。これは、「ハラキリ」が、遠い異国の慣習ではもはやなくなっていることを、示すものだろう。

5. 語彙の浸透

ところで、「ハラキリ」という語彙そのものの浸透については、どうだろうか。上に挙げた例を含め記載状況を見てみると、1903 年の時点までは、「ハラキリ」という語が、単独で使用されていることは極めてまれである。たいていの場合は、「ハラキリ」の後に、「自らの腹を切り開く」という言い換えが併記されているか、または、言い換えのみで記されている。

1904 年になると、フランスの各新聞は日露戦争関連記事をきわめて頻繁に掲載するようになる。それは当然のことながら、それまでのエキゾティスムに満ちた、夢を見させてくれる遠い国「日本」ではなく、急速に台頭し、ヨーロッパに脅威を与える軍事的な「日本」が強調される。戦況とともに、日本軍兵士の行動も報じられる。とくに、1904 年 4 月に起きた金州丸事件は、大きな衝撃をもって受け止められた。これは、ロシアの艦隊に撃沈されたために乗組員が割腹自殺をした事件である。また、6 月には同様の常陸丸事件が起きており、両者は大きく取り上げられた。『イリュストラシオン』には、1904 年の 6 月 18 日号に掲載された金州丸事件の挿絵に、「《金州丸》の英雄的な最期：船上でのハラキリ」というキャプションがつけられている。『ル・フィガロ』でも、1904 年 9 月 27 日号でこの 2 つの事件について解説をし、その中で「ハラキリ」という語を用いている。両紙とも言い換えはされていない。

これを見ると、1904 年の時点では、「ハラキリ」という語彙は、すでに相当一般化しているとみなすことが可能だろう。このことから、この語は、1903 年までの言い換えを伴う度重なる反復により、イメージとともに広く受け入れられるようになった、と考えることができる。フランスでの辞書への記載状況にも、この過程を見ることができる。というのも、この語彙が小辞典に項目として初めて収録されるのが、1905 年だからである。以下、フランスにおけるこの語彙の辞書への記載状況を少し追ってみよう。

フランスにおいて、「ハラキリ hara-kiri」が初めて辞書に登場するのは、1898 年である。それ以前には、19 世紀後半に編纂された代表的なフランス語辞書『ル・リトレ』(執筆・編纂:1847 - 1865)にも、また、全 17 巻の『19 世紀大百科事典』(1866 - 1877)にも記載はない。1898 年刊行の百科事典を兼ねた挿絵入り大辞典『ル・ヌーヴォー・ラルース・イリュストレ』*Le Nouveau Larousse illustré*(全 7 巻)になって初めて、その国語辞書部分に「日本に固有の自殺方法」という簡単な説明が記載された。さらに、その下の百科事典部分に、過去時制を用いて説明された「ハラキリ」の方法とともに、「この慣習は、現在ではすたれている。」との記述がある。しかし同年に刊行された、より使いやすく一般に流布しやすい 1 巻ものの挿絵入りフランス語小辞典『ディクショネール・コンプレ・イリュストレ』*Dictionnaire complet illustré* には、この語は収録されていない。この小辞典は、1904 年に改訂版が出されるが、そこにも hara-kiri の項目は存在しない。この間に刊行された他の出版社による辞書も見ておこう。1900 年にアルマン・コラン社から『挿絵入り百科事典』 *Dictionnaire encyclopédique illustré* が出ているが、hara-kiri は収録されていない。1901 年のアルフレッド・マーム・エ・フィス社刊行『挿絵入り百科事典』 *Dictionnaire universel illustré* にも収録されていない。

1905 年になると、ラルース社から『ディクショネール・コンプレ・イリュストレ』の後継版として別の 1 巻もの国語辞典『ル・プチ・ラルース・イリュストレ』*Le Petit Larousse illustré* が刊行される。この辞書は、大成功を収めたとされ、1906 年 12 月 15 日号の『ル・モンド・イリュストレ』掲載の同社の広告には、「1 年で 20 万部を販売」との記載がある。この辞書の中に小辞典で初めて hara-kiri という項目が登場した。その説明は「(語源:日本語)日本に固有の自殺方法で、自らの腹を切り開くことによって行われる。」というものである。収録語数が限られる小辞典に掲載されたこと、および、編纂には一定の年数が必要であることを考えると、刊行の 1905 年以前に、hara-kiri はフランスにおいてはよく知られ一般的な語となっていたと考えることができる。また、前述したように、1904 年刊行の小辞典には記載がないことを考え合わせると、1904 年刊行の辞書編纂時には収録が躊躇されていたが、その 1 年後に刊行の辞書の場合には一般に浸透しているとみなされた、と考えることができる。これらのことから、年代の特定はできないものの、1903 年ころには hara-kiri は、その行為と語とともに一般的になっていたと推測できるだろう。

しかし、この小辞典への記載では、百科事典部分が削除されているということには、注意を払う必要があるだろう。なぜなら、大辞典での記載では、国語辞書と百科事典部分を一緒に読むことによって、この語の背景を知ることができた。しかし、小辞典では、語の持つ社会的・文化的背景を知ることができないばかりか、説明が現在時制で記載されており、過去の慣習という認識を持つことができないからである。また、この辞書を参照する限りでは、日本人は「ハラキリ」をする、という一面的で単純なイメージしか持つことができないからである。

6. イメージの定着と固定化へ

さて、1905 年には、さらに日本の軍事的側面が強調された記事や書籍が現れる。例を挙げるならば、『イリュストラシオン』と同様に挿し絵を入れた新聞『ル・プチ・ジュルナル:シュプレマン・イリュストレ』*Le Petit journal : Supplémemt illustré* 1905 年 4 月 2 日号は 2 ページ近くにわたり、「日本の軍事精神」と題した記事を載せている。この中で、今までフランス人が抱いていた「小さくて、無害でもろく、デリケート」と

いう日本人のイメージは正しくなかったとし、実際は、歴史的に見ても好戦的な民族だとしている。そして、金州丸事件に触れ、「かつてのハラキリの慣習は消えたと思っていたが、誤りだった。逆に、大衆化されたのだ。1904 年 4 月、ウラジオストクの艦隊が輸送船金州丸を砲撃したとき、兵士と水兵の多くがロシア人に降伏するよりも、自らの腹を切り開くことを選んだのだ。」と記している。

書籍では、1905 年 7 月に出版された『ムスメの国、戦争の国！』[36]を挙げることができる。著者は、日本や中国を題材とした作品を多く発表し、また、『ル・タン』特派員でもあったシャルル・ペティである。この作品は、当時の同時代的な日本の諸相を紹介しているのだが、その第 20 章には「ハラキリ — ブシドー[37]」というタイトルがつけられている。その中で、ペティは、「実際、自らの腹を切り開くというこの慣習は、全く消えていない。」として、金州丸事件や、また、当時日本で流布していたとする、「自らの腹を切り開いた後に、血に浸した指で最後の意志を書き記した水兵」の大衆絵を例に挙げる。そして、民間人も兵士も数多くの日本人が、ハラキリをしている、と記しており[38]、この論調は、上記の『ル・プチ・ジュルナル：シュプレマン・イリュストレ』の記事と完全に一致している。そしてさらに、歴史上有名な例として 1868 年の神戸事件での滝善三郎や、『47 人のローニンたち（忠臣蔵）』を挙げる。ここで注意したいのは、「忠臣蔵」に対する見方が、以前とは異なっている点である。かつて、日本がまだ遠い、エキゾティスムに満ちた国とみなされていた時代には、「忠臣蔵」は忠義の例として称賛をもって紹介されていた。しかし、ここにおいては、「ハラキリ」の血なまぐさい伝統、そしてそれを好む日本人の特性を示す例として挙げられているのである。

一方、『ル・フィガロ』の社会面の記事を追っていくと、1906 年になるとフランス人の割腹自殺の記事の見出しが、「ハラキリ」と記されていることに気づく。これは、「日本人流に腹を切って自殺をする」ことを「ハラキリ」と解釈していることになり、この語がいっそう一般化していると考えられる。この表記の変化は、「ハラキリ」がそのイメージのみならず、語そのものがフランス語の語彙として浸透したことを、示していると言えるだろう。ここには、先に挙げた 1905 年刊行の 1 巻もの辞典が影響を与えていると考えられる。というのも、辞書に収録されることにより、その語彙はそこに記載された説明によって人々に理解されていくからである。

さらに、1906 年といえば、日露戦争での日本人や日本兵の行為がすでに多く報じられ、その中には先に記したように、「ハラキリ」に関するものも多くあった。それに拍車をかけるように、1906 年には、日本を象徴するものとして「ハラキリ」をフランス人にさらに印象づけた出来事がある。1900 年に川上音二郎一座の演技が大評判になったことはすでに述べたが、この年には、マダム・ハナコという人物が、フランスを席巻する。彼女は本名を太田ひさ といい、貞奴と同様に芸者の出身であった[39]。また、フランスでの公演は、やはり川上一座と同じ興行師のロイ・フラーが請け負っている。フラーはイギリスで、日本人一座で演じていたハナコを見出し、彼女を座長として一座を結成したのである。フランスでの興行にあたっては、フラーが自ら芝居の内容をプロデュースした。ハナコはのちに次のように語っている。

> 私の女の腹切りの血潮がサット迸走って、土間の前側の列の燕尾服の見物人の胸にかかったのを新聞が書立てるなどして、大入大繁盛でしたが、私は巴里には日本の美術家の留学生の方も大勢被入るし、こんな芸を見せてはと、初めは可なりフウラアさんと争ったのですが、此の大入を見て

為方がないと諦めて毎晩続け打ちました。[40]

この述懐に見るように、フラーは、川上一座の時と同様に、「ハラキリ」を取り入れるように指示している。しかも今度は、女性が行う、という趣向になっている。さらに、『イリュストラシオン』1906 年 11 月 3 日号には、彼女の「ハラキリ」の場面の詳細が以下のように記されている。

（略）喜劇が悲劇へと転じる。そのとき、オスデ Osoudé さん（これがヒロインの名前だ）が、暗い絶望に襲われ突然様子が変わる。ナイフをつかみ、ゆっくりと自らの肉体にそれを刺しこんでゆく。目は引きつり、鼻孔はぴくつき、顔面は青ざめ、彼女の白い着物は赤い露に染まる。彼女は地面に転がり、息絶える。

また、この記事の横には、踊っているハナコの写真とともに、立ったまま「ハラキリ」をする写真も掲載されている。ここからわかるのは、今回は女性のハナコに、立ったままの「ハラキリ」という演出がなされた、ということである。1900 年には、川上音二郎に立腹を切る場面を入れるよう要求し、川上は興行上の成功を優先させてそれに従った。そして、貞奴の死の演技とともに大成功をおさめ、エンターテイメントとしての「ハラキリ」のイメージを拡散させた。フラーはその経験をもとに、さらに興行的な成功を狙って、女性の死の演技と「ハラキリ」を結合させた、本来では全くあり得ない演技をハナコに求めた。そして、ハナコも自らの商業的成功を優先させて、その指示に従った。ハナコの演技は、フラーの狙い通り大成功をおさめ、多くの新聞で絶賛されている[41]。たとえば、『ル・フィガロ』1906 年 11 月 14 日号はハナコが演じる『殉死する女性』*La Martyre* に関して、次のように記している。

（略）マダム・ハナコの悲劇的で画趣に富んだ公演は、引き続き極めて強烈な成功を収めている。というのも、日本のこの偉大な女性芸術家が、完成された技芸によって行うハラキリが、眼にすることのできる最も驚くべきスペクタクルのひとつであるからだ。称賛による成功。というのも、マダム・ハナコはその情熱的なマイムの中で、強烈に心をとらえるやり方で、人間の魂の最も激しい感情を表現しているからだ。

ここにおいて、さらに歪められた「ハラキリ」のイメージが浸透したと考えることができる。イメージ拡散に関して言えば、貞奴と音二郎の時と同じ構図を見ることができる。

ハナコのフランスでの公演は、1907 年 9 月まで行われ、その名は、『ル・フィガロ』には、1906 年 10 月から 1 年間で宣伝も含め合計 64 回登場している。そして、1908 年 12 月 13 日号には、「ハラキリ」という表題の記事が掲載され、その中で、「ハラキリがどういうものか、近頃は皆知っている。」と記され、ハラキリの方法とそれによって自殺を図ったフランス人の話が掲載されている。このような状況を見ると、この段階で、「ハラキリ」は日本を象徴するイメージとしてだけではなく、その行為とともに語彙もフランス人の中にほぼ定着したと言うことができるだろう。

そのようなフランス社会の「日本」に対する受容状況を反映する作品が、1909 年に文学の分野でも登

場する。クロード・ファレールによる『戦闘』である。この作品は日露戦争の対馬海戦を題材にとったものであるが、登場人物の一人である日本人将校が切腹をする。しかし、その理由が不明確なのである。この点に関連して、著者自身が次のように記している。すなわち、「ヨーロッパ人の目によりわかりやすくするために」主要登場人物の特徴を選び構成したとし、切腹については、「実際には、1905 年 5 月 27 日の輝かしい勝利の晩に自らの腹を切り開いた海軍将校はいない[42]」としている。ここには、フランス人に最もわかりやすい、受け入れられやすい「日本」、言い換えるなら、フランス人が求める「日本」を読み取ることができるだろう。それは、日露戦争対馬海戦での日本、大義はどうであろうと、「ハラキリ」をする日本人、である。この作品は作者の狙い通り大成功をおさめ、1930 年代まで版を重ね、ミリオンセラーになった。また、20 年代以降は舞台化、映画化もされる。観客数が限られる舞台に比べ、小説や映画は多くの人々に影響を与える。すなわち、上記の「日本」のイメージのさらなる拡散と定着に大きく寄与したと言うことができる。しかし、ここに描かれた「日本」や「日本人」については、当時の日本人はすでに大きな違和感を抱いている[43]。

その後、この語と行為を強く印象付ける出来事が起きる。それは、明治天皇崩御に伴う、1912 年 9 月 13 日の乃木希典の切腹による殉死である。この出来事は、各紙で大きく取り上げられた。たとえば、『ル・モンド・イリュストレ』は、9 月 21 日号で「ごく最近《ハラキリ》をした乃木伯爵将軍」というキャプション付きで、乃木の肖像写真を掲載し、10 月 12 日号には 1 ページすべてを使用し乃木夫妻の葬儀の写真 6 枚を掲載している。さらに、19 日号には、第 1 面すべてを使用し、「ハラキリ」と題する社説を掲載している。この執筆者は、先に触れた『ムスメの国、戦争の国！』(1905)の著者シャルル・ペティである。今度は、『ル・モンド・イリュストレ』の日本特派員として、この事件を取材し解説している。内容は 1905 年当時の主張を改めて繰り返しているが、乃木の殉死に関して、次のように付け加えている。

> 実際のところ、乃木伯爵将軍のハラキリと伯爵夫人の自害は、外国においてしか驚きを引き起こさなかった。ここでは、それは高貴な戦士の家系での英雄的な最期で、ごく自然であり、もしかしたらほぼ期待されていた。そのような家系の末裔たちは、どこにでもいる市民と同じように死ぬことは、明らかにできなかった。そのうえ、いくつものハラキリが(略)最近起きており、この慣習は日本では相変わらずもてはやされている。

ここでは、乃木の殉死を語るとともに、日本では「ハラキリ」が日常的に行われているという印象を与えている。

『イリュストラシオン』も 9 月 21 日号と 10 月 19 日号で扱っている。前者では、「ハラキリ」という語を用いながら、その歴史的背景や乃木の生涯などを解説し、「彼の自害は今なお美しい日本的な行動である」と記している。後者では、1 ページすべてを用いて、夫妻の正装をした写真と記事を載せている。その記事は、「ミカドの葬儀の中で最もセンセーショナルな出来事、それは、明らかに、乃木将軍と伯爵夫人のハラキリによる自害だった。」と記し、彼の遺書を分析している。

『ル・フィガロ』も大きく扱っている。1912 年 9 月 14 日号と 9 月 15 日号で取り上げ「ハラキリ」という語を交えながら、当日の詳細な状況に加えて、殉死について、日本史研究者ラ・マズリエールによる文章

を引用して詳しく解説している。

敬愛する亡くなった主君につき従うために自らの命を「ハラキリ」によって絶つ、という乃木の行為がもたらした衝撃の大きさは、このような破格の扱いを見ると、計り知れないものであったことがわかる。そして、この出来事により、日本人の「ハラキリ」は過去の慣習ではなく現実、しかも当時の人々にとって同時代の、平時に起きた出来事として、極めて強く印象付けられた。今まで見てきたように、「ハラキリ」は、すでに、イメージも語彙もフランスでは浸透していたが、この出来事は、それまでのイメージを定着させ揺るぎないものにする役割を果たした。

では、ここで、辞書の記載状況についても見てみよう。先に挙げた 1905 年刊行の『ル・プチ・ラルース・イリュストレ』は改訂が重ねられるが、1910 年版、1922 年版に記載の変化は見られない。

しかし、1922 年にラルース社から百科事典を兼ねた 2 巻ものの辞書『世界ラルース　百科事典』*Le Larousse universel en 2 volumes : dictionnaire encyclopédique* が刊行される。この辞書の国語事典部分の説明は、『ル・プチ・ラルース・イリュストレ』と全く同じで 1905 年以来変更はない。だが、その下の百科事典部分には、刑法によって課される切腹は 1868 年まではサムライの特権であった、という内容の記述の後に、「日本人が行う自らの意志によるハラキリは、絶望から、あるいは、名誉を挽回するためや愛する長に死んでつき従うために行われるのだが、現在はほぼすたれている。しかし、1912 年に、乃木元帥とその妻は、ムツヒト天皇の葬儀の日にハラキリをした。」という説明がされている。ここからは、乃木希典の殉死が、当時の新聞への掲載状況に明瞭に現われているように、フランス人に極めて大きな衝撃を与えたということがわかる。しかしそれだけにとどまらず、乃木の殉死が実例として挙げられていることにより、国語辞書部分の現在時制による説明とともに、百科事典部分と合わせて読むと、現在もこの慣習は存在する、という点がはっきりと示された形になっている。すなわち、一般の日本人にとっては、すでに過去のものとなっている切腹が、フランス人にとっては、「場合によっては、日本人はハラキリをする」、ということを強く印象付けることになり、イメージに大きなずれが生じていることになる。この説明は、1928 年から 1933 年にかけて刊行された『20 世紀ラルース世界百科事典』*Le Larousse du XXe siècle dictionnaire encyclopédique universel*（全 6 巻）の第 3 巻（1930）に記載されている hara-kiri の説明でも踏襲されている。

このように辞書への記載状況を見てくると、それは、フランスにおけるこの語の浸透過程を裏付ける結果となっていることがわかる。20 世紀半ばまでフランスにおいて、辞書で圧倒的なシェアを誇っていたのは、ラルース社である。それを考慮するならば、ラルース社刊の辞書への記載状況は、当時のフランス語の状況をかなりよく表していると言うことができる。

また逆に、辞書は、人々がその説明を参照することによって、その説明内容が人々に大きな影響を与えることになる。すなわち、イメージの固定化および拡散装置として機能するのである。この観点から考えるならば、1905 年刊行の小辞典への収録を機に、その簡略化された一面的な説明によって、「日本ではハラキリが行われる」という、日本人の認識とは異なるイメージが、そして、1922 年刊行の百科事典においてもその説明によって、さらに同様のイメージが固定化されるとともに一層拡散されたと言うことができるだろう。

7. おわりに

以上、「ハラキリ」がフランス人の間に「日本」のイメージとして形成され、語彙とともに定着・固定化していく過程を考察してきた。それにより、「ハラキリ」のイメージは、長い時間をかけて、しかも多くの要素が複合的に作用しあうことによって、形成され定着したことが明らかになった。それらの要素は、大雑把に見ていくなら、次のようになるだろう。第一には、初期段階として、メディアによって伝えられる情報や実際に起きた出来事の報道、および書物によって紹介される情報が挙げられる。第二に、同じ情報の反復である。そして第三に、それにより広まりつつあった、あるいはすでにかなり広まっていたイメージのフランス側による意図的な選択。これは、報道、書物、芸術などあらゆる分野で見られた。第四には、それを承知の上でそのイメージを利用する日本側の戦略的姿勢。これは、とくに、イベントやエンターテイメントの分野で顕著であった。この要素は、日本人自身による行為であったため、影響は大きかった。これによって、一面的で歪められたイメージが拡散された。そして第五に、そのイメージを一層強化する現実の出来事とその報道による相乗効果である。これにより、語彙とイメージは一層浸透する結果となった。そして、忘れてならないのは、辞書の役割である。すなわち、語彙の浸透により、辞書への記載が行われ、語彙とイメージの定着と固定化が進んだ。しかも、それによって、さらなる拡散が生じた、ということになる。

「ハラキリ」に関して特徴的なのは、イメージの浸透が先に生じ、その後に語彙が浸透したという点である。その理由としては、以下のような要因が考えられる。すなわち、「ハラキリ」が行為であるということ、したがって、歴史的・社会的・文化的背景を切り離して行為のみを行うことができたこと、演劇や舞踊などのエンターテイメントに取り入れやすかったこと、その行為がフランス人にとって極めて異質でセンセーショナルであったために、それを目にすれば、忘れがたい強い印象を受けることになったこと、である。

冒頭に記したアンドレ・マルローの日本でのインタヴューは、1931 年に行われた。上記の考察から明らかなように、この時代すでに、「ハラキリ」という語彙とその意味する内容が、フランスに定着・固定化していた。そして、その後の現象として、そこに記載された内容が今度は、拡散していったと考えられる。つまり、百科事典までのより詳しい説明を念頭に置けば、「意志的な行為としての「ハラキリ」は名誉のためや、敬愛する主君の死に際し、自らも死んでつき従うために行われる、特別な意味を持った行為」、ということになる。そして、このような「ハラキリ」は乃木希典の例に見るように、過去のものではない、という解釈を成立させるだろう。日本においては、極めてまれなケースと考えられていた事柄も、このような説明からであると、受け取り方が異なるのではないだろうか。マルローも、当時のこのような状況に、無意識のうちに影響を受けていたのかもしれない。

また、より一般的には、すなわち、単に語の意味のみを求める場合には、国語辞書の説明だけを参照することになる。であれば、「ハラキリ」は、「日本の自殺方法である」、その方法は、「自らの腹を切り開くことである」、というのが、意味となる。この単純化された第一義的な意味により、「ハラキリ」は「日本」のイメージのひとつとして、広く拡散していったと考えることができるのではないだろうか。

本稿の考察は、「ハラキリ」に限定したものではあるが、ここで明らかとなったイメージの形成と定着・固定化の過程およびそのメカニズムは、異文化を理解する場合に生じる一例として、我々に示唆してくれるものは少なくないだろう。

【註】

[1] Cf. 小松清「人間マルロオ」、A.C.F（フランス文化友の会）編『アンドレ・マルロオ』 現代作家フランス叢書 II、新樹社、1951、p.198.

[2] 同上。

[3] この点に関しては、山崎ゆき子「アンドレ・マルローにおける「武士道」－異文化理解の視座から—」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第 5 号、2015、所収、を参照されたい。

[4] 『イリュストラシオン』の 1843 年から 1905 年までの記事は、横浜開港資料館編『『イリュストラシオン』日本関係記事集』 第1巻：1843 - 1880（1986）、第2巻：1881 - 1903（1988）、第3巻：1904 - 1905（1991）、横浜開港資料館、を使用している。

[5] 尾佐竹猛著、吉良芳恵校注『幕末遣外使節物語：夷狄の国へ』（岩波文庫、2016）には、池田筑後守一行のフランスでの様子が記されている。

[6] 『ル・フィガロ』は 1877 年 7 月 25 日号で、かつてのフランス海軍士官の回想として、掲載している。記事内には、「自らの腹を切り開く」という表現が使われている。

[7] この時期、「ハラキリ」のフランス語表記はまだ一定していない。以下、本文内ではすべて「ハラキリ」で記す。

[8] たとえば、7 か月の開催期間中に、『ル・モンド・イリュストレ』は挿絵とともに 4 回紹介している。

[9] 当時の状況については、木々康子、『林忠正—浮世絵を越えて日本美術のすべてを—』、ミネルヴァ書房、2009、pp.33-35, 38 に詳しい。また、具体的な様子は『イリュストラシオン』1878 年 6 月 8 日号、6 月 15 日号、6 月 29 日号、『ル・モンド・イリュストレ』1878 年 6 月 22 日号、8 月 24 日号などに掲載されている挿絵で見ることができる。

[10] Georges BOUSQUET, *Le Japon de nos jours et les echelles de l'Extrême-Orient*, Tome 1, Tome 2, Hachette, 1877. 切腹についての説明は、T.1,p.111, T.2, pp.26-27. ブスケは、切腹の説明の中で「忠臣蔵」を例に挙げている。

[11] Edmond de GONCOURT, *La Maison d'un artiste* I, in *Œuvres complètes* XXXIV-XXXV, Edmond et Jules de Goncourt, Slatkine Reprints, 1986, pp.186-188.

[12] Edmond de GONCOURT, *La Maison d'un artiste* II, in *Œuvres complètes* XXXIV-XXXV, op. cit., p.234.

[13] 為永春水の『いろは文庫』の英訳版をフランス語に訳したもの。*Les Fidèles Ronins*, Quantin, 1882.

[14] Cf. *Journal des Goncourt : mémoires de la vie littéraire* VI, Charpentier, 1892, pp.295-296.

[15] Pierre LOTI, 〈Au Tombeau des samouraïs〉in *Japoneries d'automne*, Calmann-Lévy, 1889, pp.260-261. この作品は、出版前の 1888 年に、『ル・モンド・イリュストレ』11 月 10 日号に未発表作品として〈Les Tombeaux des samouraïs〉というタイトルで、挿絵とともに掲載されている。

[16] *Ibid*., pp.268-269.

[17] *Ibid*., p.265.

[18] Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *Essai sur l'histoire du Japon*, Plon, 1899, pp.246-247.

[19] Harry ALIS, *Hara-Kiri*, Paul Ollendorff, 1882.

[20] *Le Figaro : Supplément littéraire,* le 15 février 1890.

[21] 1888 年 4 月 21 日から、パリ・オデオン座で上演された、5 幕の演劇作品。『イリュストラシオン』1888 年 5 月 24 日号は、この作品の紹介とともに、「大成功。芝居の最後に、あのゴーティエの名が発表されると、客席全体が拍手喝采をした。」と観客の様子を伝えている。『ル・モンド・イリュストレ』1888 年 5 月 19 日号にも、簡単な作品の紹介と、日本をイメージした舞台装置とともに、刀を差しちょんまげを結った男性や、着物を着た女性などの登場人物の挿絵が掲載されている。

[22] *Le Figaro : Supplément littéraire*, le 15 février 1890.

[23] 「ウタマロ、青楼の画家」という表現は、1891 年に出版されたエドモン・ド・ゴンクールの著作名でもある。 *Outamaro: le peintre des maisons vertes*

[24] *Le Figaro*, le 23 juillet 1891.

[25] 川上音二郎・貞奴『自伝 音二郎・貞奴』、三一書房、1984、pp. 152-153.

[26] 同上、p.155。

[27] *Le Figaro,* le 1er juillet 1900.
[28] André GIDE, 〈Lettres à Angèle〉 in *Prétextes : Réflexions sur quelques points de littérature et de morale*, Mercure de France, 1919, p.136.
[29] *Ibid*., p.138.
[30] *Ibid*., p.137.
[31] *Le Figaro,* le 22 novembre 1900.
[32] フランス国立図書館にフラーのものも含め、12 枚ほどの写真が所蔵されている。フランス国立図書館が付した説明によれば、川上一座の写真は、『芸者と武士』の舞台とされ、これらの写真は絵葉書としても存在している。
http://multimedia.bnf.fr/visiterichelieu/collections/grilles/yacco.htm (2016.11.11 閲覧)
[33] Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *Le Japon : histoire et civilisation,* Tome III: *Le Japon des Tokougawa*, Plon-Nourrit, 1907, p.543. ここでは演目は記されていないが、場面の内容から『菅原伝授手習鑑』について語っていると思われる。
[34] 他の例としては、Charles PETTIT, *Pays de mousmés, pays de guerre !* , Juven, 1905 には、第 6 章に日本で貞奴と音二郎に会った時の事が記されている。また、1908 年 10 月 31 日号の『ル・フィガロ』に掲載された裁判関連のニュースでは、夫を殺害した被告のろうあ女性が法廷で事件を身振りで再現する様子を、「貞奴を思い起こさせる」と表現している。さらに、『イリュストラシオン』1906 年 11 月 3 日号、『ル・フィガロ』1907 年 6 月 12 日号などでも、貞奴に言及している。
[35] 例えば、1901 年 4 月 18 日、5 月 18 日、1902 年 5 月 31 日、1903 年 3 月 10 日など。
[36] Charles PETTIT, *Pays de mousmés, pays de guerre !*, op., cit.
[37] ここで記されている「ブシドー」は le bouchido とつづられており、新渡戸稲造の著作『武士道』および、歴史学者ラ・マズリエールが 1905 年に紹介する「ブシドー」(*Le Bushido : Conférence faite à la Société Franco-Japonaise le 1er Avril 1905*, Imprimerie de la Cour d'Appel, 1905) の綴りとは異なる。また、内容も著者独自の説明となっており、両者の影響は見られない。
[38] *Ibid*., p.211.
[39] ハナコについては、(根岸理子「マダム花子—「日本」を伝えた国際女優—」『演劇学論集 紀要 53』、日本演劇学会、2011、および、大野芳「ヨーロッパを席巻した幻の女優「マダム花子」」『新潮 45』2014 年 4 月号、に詳しい。
[40] 「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」『新日本』1917 年 1 月号所収、(根岸理子「マダム花子—「日本」を伝えた国際女優—」『演劇学論集 紀要 53』、前掲書、の引用による。p.48)
[41] 中には、『ル・モンド・イリュストレ』のように、フランス人の演じる日本を題材にした演劇は紹介しているにもかかわらず、ハナコの名には一切言及していないものもある。
[42] Claude FARRERE, *La Bataille: roman*, Ernest Flammarion, c1921, pp.X-XI.
[43] たとえば、小説家であり、演出家でもある岩田豊雄（獅子文六）は、この作品とその舞台について、「原作の小説なるものがはなはだ馬鹿げた代物で、これを脚色すると見事に愚劣が拡大される。」と記している。（岩田豊雄『岩田豊雄演劇評論集』、新潮社、1963、p.55.）
1910 年代・20 年代にパリで上演された日本に関連する演劇については、茂木秀夫「両大戦間期パリ劇壇のジャポニスム」神山彰編『演劇のジャポニスム』、森話社、2017、に詳しい。